

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 26 日現在

機関番号：84604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370146

研究課題名(和文)法隆寺・東大寺宝物に見られる「イラン文化」：エフタルとソグドの影響について

研究課題名(英文)Iranian culture discerned in the treasures of the Horyu-ji and Todai-ji temples: its relation to the Hephthalite and Sogdian culture

研究代表者

影山 悦子 (Kageyama, Etsuko)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・企画調整部・アソシエイトフェロー

研究者番号：20453144

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、法隆寺・東大寺宝物に見られる「イラン文化」の実態を明らかにすることを目的とし、「イラン文化」=西アジアのササン朝ペルシアの文化という従来の捉え方を見直し、5世紀後半から6世紀前半に中央アジアを支配したエフタルや、ソグドの影響も及んでいることを、具体的な事例を挙げて証明することを試みた。中央アジアや中国で発見された図像資料を検討することにより、東大寺正倉院に伝わる大刀の佩刀方法にはエフタルの影響が認められることや、伎楽面の酔胡王のモデルが北朝期の中国のソグド人聚落の首領であることを示した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is re-examination of the “Iranian culture” hitherto observed in the treasures of the Horyu-ji and Todai-ji temples, which has been traditionally considered as the culture of the Sasanian Dynasty. On some treasures we can observe the influence of the Hephthalites which controlled Central Asia from the middle of the fifth century to the middle of the sixth century as well as the influence of the Sogdians. Through examination of iconographical material from Central Asia and China, we have demonstrated that the suspension system of the swords in the Todai-ji treasures is the new method introduced in Central Asia during the Hephthalite period and that the wooden masks of Drunken hu King “Suiko-ou” in the treasures portray a leader of Sogdian colonies existed in China during the Northern Dynasties.

研究分野：ソグド文化史

キーワード：中央アジア ソグド エフタル 図像 正倉院

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 唐代の「イラン・モード」に関するこれまでの研究

法隆寺・東大寺宝物にササン朝ペルシアの影響が認められることは早くから指摘され、東西交渉史の主要な研究テーマとなった。ササン朝の影響を示すとされる資料の多くは、8世紀半ばまでに唐から伝来したと推定されている。実際に、唐代の文献は、都長安が胡曲、胡食、胡服と胡色一色であったことを伝える。このような流行を生んだのは、7世紀半ばに崩壊したササン朝から中国に亡命した王族と職人であるとされた。

しかし、その後、中国北部で発見された墓誌などの研究により、中国に移住したイラン系民族の大多数は、イランではなく、中央アジアのサマルカンドを中心とする地域の出身であるソグド人であることが明らかにされている。遠距離交易に従事したソグド人は、6世紀には中央アジアで最も有力な商人集団となり、中国、インドとの交易を独占するに到った。実際に、6世紀に活躍したソグド人の墓が、1999年以降、西安や太原で相次いで発見されている。墓主の多くは、北朝から「薩保」という官職に任命され、ソグド人聚落の管理を任されていた人物である。葬具の浮彫には、葡萄の木の下での祝宴、楽隊とダンサー、狩猟、ゾロアスター教の儀式などが表され、ソグド人聚落内部では、ソグドの文化・風俗・宗教が維持されていたことが明らかになった。

最近では、このように、中国社会のただ中で固有の文化・風俗を保持したソグド人の共同体の存在が、唐代の「イラン・モード」の出現を準備したと考えられている。

(2) エフタルの中央アジア支配に関する最近の研究動向

ソグド人が中国に大量に移住した要因として、紀元後500年前後から50年以上の間、エフタルが中央アジア全体を安定して支配したことが挙げられている。中央アジアの政治的安定がソグド人の交易活動を活発にし、中国に定住するソグド人の増加を促したと考えられる。クシャーン朝が中央アジアを支配した時代に、ガンダーラの仏教や美術が東方に伝播したことは周知のとおりであるが、最近の文献学の研究によって、エフタルはクシャーン朝に匹敵するほどの文化的影響を中央アジアのより広い地域に与えた可能性が指摘されている (Y. Yoshida, "Some reflections about the origin of *čamūk*", 森安孝夫(編)『中央アジア出土文物論叢』朋友書店, 2004, 129-136)。また、J. イリヤソフの研究によって、中央アジアの美術に認められるササン朝の影響は、ササン朝から東方へと伝播したのではなく、ササン朝の影響を受けたバクトリア地域の文化がエフタル帝国全体に広まった結果であることが明らかにされている (J. Il'yasov, "The

Hephthalite Terracotta", *Silk Road Art and Archaeology* 7, 2001, 187-200)。

さらに、エフタルはイラン系民族であるとする説もあったが、現在では、4世紀にフン族(匈奴)とともにアルタイ地方から西に移動した遊牧民集団の一つで、バクトリア(アフガニスタン北部)にとどまり、次第に定住したとみられている。

## 2. 研究の目的

上で述べた通り、ササン朝美術の東方伝播は、エフタルによる中央アジアの政治的統一とソグド人の交易活動によって実現したことが、最近の研究によって明らかにされつつある。すなわち、ササン朝の文化はエフタルによって受容され、エフタル帝国の文化の一部として支配地域に広まると同時に、ソグド商人の移住とともに中国に伝わったと考えられるのである。これまで、法隆寺・東大寺宝物は、唐の都長安で流行したササン朝文化を伝えるとされてきたが、最近の研究をふまえて考えれば、ササン朝だけでなく、エフタルやソグドの影響も認められるはずである。本研究の目的は、法隆寺・東大寺宝物を再検討し、中国・日本に伝わった「イラン文化」の実態を明らかにすることである。

筆者は、イリヤソフによる先駆的な研究を受けて、エフタル支配期に中央アジア全体に流行した冠や服飾の一部が、図像表現の一部として中国や日本にも伝播したことを明らかにした(影山悦子「中国新出ソグド人葬具に見られる鳥翼冠と三面三日月冠: エフタルの中央アジア支配の影響」『オリエント』50-2, 2007, 120-140.)。日本への伝播は法隆寺や正倉院の宝物を検討することによって確認されたが、これまでの研究では宝物の一部を対象とするに留まっていた。本研究では、宝物全体に目を配り、その中に、ササン朝の影響だけでなく、エフタル、ソグドの影響が認められるかどうか検証することにした。

既に研究しつくされた印象がある法隆寺・東大寺宝物ではあるが、中央アジアや中国の新出資料と比較して、再検討する時期が来していると考ええる。最新の研究成果をふまえて、新しい視点で宝物を見直せば、新たな知見が得られるはずである。

クシャーン朝と比べてエフタルは、その歴史、王統、支配体制、発行貨幣など、いまだ不明な点が多い。本研究によって、エフタル帝国時代に流行した武器や服装などが判明すれば、その影響力の大きさをより一層強調することができ、また中央アジアの図像資料の製作年代の解明にも手がかりを与えることができるだろう。

## 3. 研究の方法

(1) 対象となる資料の抽出

まず、法隆寺・東大寺宝物のうち、西アジア・中央アジアで製作された可能性のある宝物、両地域の影響が認められる宝物を抽出し

た。ガラス器、銀器、什器、武器、染織品(錦、絨毯)、楽器、伎楽面などから、該当する資料を抽出し、それぞれの資料のサイズ、材質、先行研究(美術史研究、文献研究、自然科学的分析)、推定される製作地、製作年代、類例、比較すべき資料などをまとめた。

次に、西アジア・中央アジア・中国で発見された遺物のうち、法隆寺・東大寺宝物と比較することができる図像資料を抽出した。ササン朝の摩崖浮彫、パーミヤン、バクトリア、ソグド、クチャ等で発見された壁画、バクトリア、ソグド出土の封泥、エジプト、トルファン等で発見されたササン朝、ソグド、唐の絹織物、北・中央アジア等で発見されたササン朝、ソグド、バクトリアの銀器、西アジア、中央アジアの影響が認められる唐の錦、銀器、中国に移住したソグド人の墓で発見された石製葬具、日本や欧米の博物館が所蔵する武器、銀器、ガラス器、絹織物などから、該当する資料を抽出し、各資料のサイズ、材質、所蔵先、先行研究(美術史研究、文献研究、自然科学的分析)、発見場所(または推定される出土地・製作地)、製作年代、類例、比較すべき資料をまとめた。

#### (2)対象となる資料の比較検討

次に、抽出した宝物を西アジア・中央アジア・中国の図像資料と比較検討し、宝物の中に、エフタル時代の中央アジアで栄えた文化の影響が認められるか、もしくは中国のソグド人聚落の文化の影響が認められるか検証した。図像の類似性だけで判断するのではなく、文献資料の研究、自然科学的な分析の成果も活用した。

#### (3)実物調査

ウズベキスタンのタシケントとサマルカンド、フランスのパリに出張し、博物館等で本研究の対象となる資料の実物調査を行った。国内では、東京国立博物館(法隆寺宝物館)、奈良国立博物館(正倉院展)において、本研究の対象となる資料の実物調査を行った。ウズベキスタンおよび奈良国立博物館での実物調査には、連携研究者の島津美子助教にも同行してもらい、材料や技法について助言をいただいた。

#### (4)中央アジア史に関する研究動向の把握

エフタルの中央アジア支配に関する最新の研究成果を入手し、活用することにつとめた。特に、エフタルがキダーラを破ってバクトリアの支配者となり、ソグドやパミールの東のオアシス都市へと勢力を拡大していった経緯は明確ではない。主に文献資料をもとに、エフタルの中央アジア支配の影響を研究している連携研究者の吉田豊教授から、最新の情報を提供していただいた。

#### 4. 研究成果

本研究では法隆寺・東大寺に伝わる宝物全

体を対象としたが、特に鞘の2カ所に金具のある大刀と酔胡王・酔胡従の面について重点的に考察した。

#### (1)佩刀方法

鞘の2カ所に金具をつけて、2本のひもで腰のベルトから斜めに剣を吊るす方法は、ササン朝で後期に採用され、その後ササン朝から中国、日本に伝わったと考えられてきた。しかし、バクトリアやソグド、クチャの壁画などを見ると、この佩刀方法は、エフタル支配期に一気に中央アジアに広がり、その後定着したことが推測される。ササン朝で佩刀方法が変化したのは、エフタルの影響によるものと考えられる。もしこの推測が正しければ、日本に伝わる2カ所に金具のついた大刀の起源は、ササン朝ではなく、エフタルに求めなければならない。この仮説を検証するために、関連する剣の図像資料と実物資料の収集を行った。

その結果、エフタル支配期に、中央アジアにおいて腰のベルトから並行に短剣を吊るす習慣が広まったことが認められる。その方法は、鞘の2カ所に金具をつけて、そこに1本ずつ紐を通して、腰のベルトに結び、短剣を並行に吊るすというものである。5世紀後半から6世紀前半に製作されたと考えられるソグドの壁画には、このような方法で短剣を佩く供養者が描かれている。その後、この方式(二点方式)は長剣にも応用され、2カ所の金具に長さの違う紐をとおして、腰のベルトに結び、剣を斜めに吊るす習慣が中央アジアに広まったことが確認される。二点方式は中国にも伝わるが、短剣よりも長剣の佩刀方法として広まったようである。実際に、2カ所に金具のついた長剣の実物が、570年頃の墓から出土している。その後、唐代になると、二点方式が長剣の標準的な佩刀方法として定着したことが、壁画などによって認められる。唐で製作された二点方式の大刀が日本にもたらされ、日本でもこの佩刀方法が普及し、長い間使用されたと考えられる。したがって、東大寺正倉院に伝わる「唐大刀」などの佩刀方法は、エフタルの支配地域に広まったものが、中国を経由して日本に伝わったことが確認された。

#### (2)酔胡王・酔胡従の面

一方、伎楽面に含まれる酔胡王と酔胡従の面には、深目高鼻の「胡人」が表現される。酔胡王は、頂部がとがっていない帽子をかぶることによって、酔胡従とは区別されている。酔胡王の面はペルシアの王をモデルとする、という解説を見るが、ペルシアの王は、通常、三日月や鳥翼で飾られたおそらくは金銀製の冠を戴いた姿で表現され、このような簡素な帽子だけを頭飾とする例は確認されていない。ところが、2000年に西安で発見されたソグド人の墓から、酔胡王と同じような形の白い帽子をかぶった人物を表す浮彫が発見

された。墓に納められた漢文の墓誌から、埋葬されていたのは北周時代に「薩保」という官職に任命された安伽というソグド人であることが知られ、石製の葬具に彫刻された白い帽子の人物は、生前の安伽を表していることが明らかにされた。「薩保」とは、当時、中国の各地に存在したソグド人聚落の首領に北朝政府が与えた称号である。他にもソグド聚落の首領であった人物の墓が発見されているが、彼らも頂部が平らな帽子をかぶった姿で表現されることが多い。このことから、頂部が平らな白い帽子は、「薩保」のトレードマークであった可能性が指摘されている。

以上のことから、酔胡王の面は、中国に実在したソグド人聚落の首領がモデルとなって製作された可能性が高い。当時の中国のまちでは、ソグド人の首領とその従者が酔っ払っている姿を見かけることが珍しくなかったのだろう。そうであるとすれば、酔胡王・酔胡従が登場する伎楽は、唐代以前に成立していた可能性が高い。なぜなら、唐代になると、ソグド人聚落の統治者としての地位が「薩保」には認められなくなったからである。

### (3)その他

佩刀方法と酔胡王・酔胡従の面の他に、東大寺正倉院に伝わる「鷲連珠文錦幡垂瑞錦」の文様に注目した。この幡に使用されたのは、唐代で製作された経錦で、翼を広げて飛び立つ鳥を腹側から見た姿を連珠円文の中に表現している。鳥の腹の部分に表された円形の模様が何を表しているのか、この断片では判別できない。しかし、中国青海省都蘭で発見された同様の文様の錦では、この部分に人間の全身像がろうじて認められる。したがって、東大寺正倉院の当該幡の鳥の腹部に見られる円形の模様は、人間の全身像の写し崩れであるとみるのが妥当である。

女性をさらって飛び立つ巨大な鳥を腹側から表す図像は、ガンダーラの菩薩像の頭飾や、ウズベキスタン南部のザルテパ仏教遺跡出土壁画、中国の新疆ウイグル自治区キジル仏教石窟天井画など、北西インドや中央アジアの仏教美術の中に認められる他、ササン朝の銀器にも表現されている。本研究によってこの図像が中国においても錦の文様として使用されるほど流行し、日本にも伝わっていたことが判明した。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

影山悦子「ソグド美術に見られるインド美術の影響について」宮治昭(編)『アジア仏教美術論集』中央アジアⅠ(ガンダーラ～東西トルキスタン)中央公論美術出版、2017、309-330、査読無

影山悦子「唐代のケン祠：考古資料による検討」『唐代史研究』19、2016、3-21、査読無

Etsuko Kageyama, "Change of suspension systems of daggers and swords in eastern Eurasia: its relation to the Hephthalite occupation of Central Asia", *Zinbun: Memoire of the Research Institute for Humanistic Studies, Kyoto University* 46, 2016, 199-212, 査読有  
DOI: 10.14989/209942

Etsuko Kageyama, "Newly identified Iranian motif of brocade in Shosoin storehouse in Japan", *The Third Asia Cultural Forum, Paper abstracts and speeches*, 2015, 249-250、査読無

影山悦子「ユーラシア東部における佩刀方法の変化について：エフタルの中央アジア支配の影響」『内陸アジア言語の研究』30、2015、29-47、査読無

影山悦子「ソグド人の墓と葬具：中国とソグディアナ」森部豊(編)『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉』(アジア遊学 175) 誠誠出版、2014、61-86、査読無

〔学会発表〕(計3件)

影山悦子「法隆寺・東大寺宝物に見られる「イラン文化」：エフタルとソグドの影響について」日本オリエント学会第57回大会、2015年10月18日、北海道大学(北海道・札幌市)

影山悦子「唐代のケン教信仰について：考古資料による検討」唐代史研究会、2015年8月17日、早稲田大学国際会議場(東京都・新宿区)

Etsuko Kageyama, "Two-point suspension system of daggers and swords in pre-Islamic Eastern Eurasia" 国際学術研究会「粟特人在中国：考古発現与出土文献的新印証」、2014年8月14日、(銀川・中国)

〔その他〕

影山悦子「ペルシア人とソグド人：酔胡王のモデルどっち？」探検! 奈文研 158、読売新聞奈良版、2016年11月20日

影山悦子「東大寺正倉院宝物と中央アジア」コラム作寶樓、2016年5月16日、奈良文化財研究所ホームページ  
<https://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/2016/05/20160516.html>

### 6. 研究組織

(1)研究代表者

影山 悦子 (KAGEYAMA ETSUKO)  
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財  
研究所・企画調整部・アソシエイトフェロ  
ー  
研究者番号：20453144

(2)連携研究者

吉田 豊 (YOSHIDA YUTAKA)  
京都大学・文学部・教授  
研究者番号：30191620

島津 美子 (SHIMAZU YOSHIKO)  
国立歴史民俗博物館・研究部情報資料研究  
系・助教  
研究者番号：10523756